

新しい学校は、どんな学校になるのか (前回の続き)

1.はじめに

1.はじめに

(1) 本資料作成の目的

- P T A 会長・副会長主催の保護者座談会などで、保護者の皆さまから多くの貴重なご意見・ご質問をいただきました。

「今の学校のままでなぜダメなのか」

「新しい学校がどんな学校になるのか、具体的なイメージが持てない」

といった声が寄せられています。

- 本資料は、このような疑問や不安を少しでも解消し、皆さまと「今後の小高小・小高中のあり方」を考えるための資料として作成しました。

- なお、資料については、疑問や不安を段階的に解消し、より深くご理解いただくため、2回に分けて説明します。前回の資料では、今後の議論の前提となる基本的な考え方についてを説明しました。

- 今回の資料では、保護者の皆さまから寄せられた義務教育学校になった際の不安や疑問な点を、他市の義務教育学校の事例などを用いて説明します。

1.はじめに

(2) 前回、説明した内容

【前回、説明した内容】

■「なぜ、学校の形を変える必要があるのか」

小中一貫教育の有効性、目指すビジョン、なぜ学校の形を変えるのかなど

■「新しい学校は、どんな学校になるのか」

他自治体の義務教育学校の具体例

➤ 例:児童生徒の交流、日課表、教職員の連携など

(3) 今回、説明する内容

■「新しい学校は、どんな学校になるのか」の続き

特に多く寄せられた「より具体的な項目」について、

他自治体の義務教育学校の事例などを使って、より具体的にイメージが湧くように説明します。

- リーダーシップの機会
- 節目の行事
- 異年齢が過ごすことへの配慮
- 環境の固定化
- 心のケア・相談体制

- また、「新しい学校における特色の検討方法」と「校舎等の活用に関する基本的考え方」についても今回説明します。

2.他自治体の義務教育学校の事例

2.他自治体の義務教育学校の事例

(1) 義務教育学校への不安や疑問

本章では、保護者の皆さまから寄せられた、義務教育学校への不安や疑問について、調査した12校の義務教育学校の事例を用いて説明します。

- ① 義務教育学校になり9年制になったら、6年生が最高学年としてリーダーシップを発揮する機会が失われてしまうのでは？
- ② 小学校の卒業式や中学校の入学式など、節目となる行事がなくなり、気持ちの切り替えができないのでは？
- ③ 1年生から9年生が同じ空間で過ごすことで、異年齢間でのトラブルだったり、思春期・受験期の高学年がストレスを感じたりするのでは？
- ④ 9年間同じ校舎・人間関係で過ごすことによるマンネリや息苦しさはないのか？
- ⑤ 新しい環境や固定化された人間関係から生じるストレスに対し、子どもたちの心のケアや相談体制が十分に整備されるのか？

これら保護者の皆さまの不安や疑問について、他の義務教育学校ではこういった取組を行っているのか説明します。

①リーダーシップを発揮する機会について



義務教育学校になり9年制になったら、6年生が最高学年としてリーダーシップを発揮する機会が失われてしまうのでは？

他の義務教育学校の取組（具体的な取組内容）

【行事や活動で6年生が主要な役割を担当】

- ・縦割りでの清掃や交流会、1年生を迎える会、運動会などで、5・6年生がリーダーシップを発揮できるような機会を意図的に設ける。
例：運動会は1～9学年の縦割り班対抗の「スポーツフェスタ」という名称で実施し、企画や運営は5・6年生が中心となって行う。
- ・宿泊活動や田植え・稲刈り、縦割り班遊びなど、前期課程独自の行事で6年生が準備・運営を行っている。加えて、全学年での活動（運動会など）でも、6年生が運営を担い、責任感を育んでいる。
- ・縦割り班での遠足に行く際、ルート選定や班内でのレク活動は5・6年生が行っている。

①リーダーシップを発揮する機会について



義務教育学校になり9年制になったら、6年生が最高学年としてリーダーシップを発揮する機会が失われてしまうのでは？

他の義務教育学校の取組（具体的な取組内容）

【学年ブロック※1ごとのリーダー育成】

- ・9学年を低ブロック（1～4学年）、中ブロック（5～7学年）、高ブロック（8～9学年）に分け、ブロックごとのブロック集会を行っている。また、清掃活動も1～4学年、5～7学年は縦割りの班ごとに行っており、発達段階に応じたリーダーの育成に努めている。

低ブロック：七夕集会などの縦割り班での遊び、4年生が企画

中ブロック：5・6年生にも定期テストが課されるため、7年生が勉強の方法・経験を語る定期テスト集会を開催

高ブロック：高校の先生を招いて行う進路説明会では、9年生が運営・進行を務める

※1 学年ブロック（学年段階の区切り）とは：

従来の「小6・中3」という枠組みを取り払い、子どもの成長に合わせて9年間を「6-3」「4-3-2」などのまとまりに分け、学習や生活に意図的な変化と節目を持たせる仕組み。なお、この学年ブロックは教育内容そのものを変更するのではなく、カリキュラム・指導上の工夫を施すための便宜的な区切りであり、学年段階に応じた学習内容・進度については、通常の小学校・中学校と同様。

（例：6-3制と4-3-2制どちらも義務教育学校7年生の学習内容・進度は基本的に同じ）

①リーダーシップを発揮する機会について

他の義務教育学校が捉えている成果・効果

- ・後期課程の先輩と関わり、理想のリーダー像を学べる
- ・前期課程児童との交流が後期課程での大きな成長につながる

課題・苦勞している点

- ・一部の義務教育学校では、6年生がリーダーシップを発揮する機会が少なくなっている現状にある。
- ・後期課程（中学生）がリーダーとして存在しているため、どうしても子どもたちが後期課程に頼ってしまう場面が見られる。

他の義務教育学校の事例を受けての評価・総括

- 前期課程独自の行事や縦割り活動を意図的に設けることで、5・6年生がリーダーシップを発揮する機会は十分に確保できる。
- 同時に、後期課程の先輩の姿を身近に見本として、理想のリーダー像を自然に学べる点は、義務教育学校ならではの大きな魅力である。
- 本市においても、こうした縦割り活動や前期課程独自の行事を参考に、5・6年生が活躍できる場を具体的に検討していきたい。

②節目となる行事について



小学校の卒業式や中学校の入学式など、節目となる行事がなくなり、気持ちの切り替えができないのでは？

他の義務教育学校の取組（具体的な取組内容）

【小学校の卒業式に代わる取組】

- ・ 小学校卒業に代わる「前期課程修了式」を卒業式同様の形式で別途開催。
- ・ 通常の修了式で修了証書の授与や6年生全員の名前を呼称するなどの工夫。

【7年生での取組】

- ・ 7年生の2月に立志式を実施。立志式では、今後の目標や自分を表す漢字一文字を書き、保護者の前で夢や目標とともに発表する。



※他の義務教育学校のなかには、9年間の連続性を重視して、学年途中での節目の行事を設けていない学校もある。

②節目となる行事について



小学校の卒業式や中学校の入学式など、節目となる行事がなくなり、気持ちの切り替えができないのでは？

他の義務教育学校が捉えている成果・効果

- ・ 前期課程修了式に保護者を招待しており、満足していただいている

他の義務教育学校の事例を受けての評価・総括

- 前期課程修了式や立志式など、新たな節目を設ける学校がある一方、9年間の連続性を重視して、あえて節目の行事を設けない学校もある。行事の有無だけでなく、子どもや保護者が成長を実感できる機会をどのように確保するかが重要である。
- 本市においても、修了式や立志式などの行事を参考に、子どもや保護者が成長を実感できる機会を具体的に検討していきたい。

③異年齢がともに過ごすことへの配慮



1年生から9年生が同じ空間で過ごすことで、異年齢間でのトラブルだったり、思春期・受験期の高学年がストレスを感じたりするのでは？

他の義務教育学校の取組（具体的な取組内容）

【生活スペース・動線の工夫】

- ・ 1～4学年の教室は北校舎、5～9年生の教室は南校舎とし、昇降口も分けている。
- ・ 休み時間の校庭の使用場所を前期課程・後期課程で分ける。
- ・ 教室によってトイレの使用場所を決めている。
- ・ 後期課程のテスト期間には後期課程の棟への立ち入りを制限。
- ・ 階段の色を異なる色にし、学年ごとに使用する階段をわかりやすくする。

③異年齢がともに過ごすことへの配慮



1年生から9年生が同じ空間で過ごすことで、異年齢間でのトラブルだったり、思春期・受験期の高学年がストレスを感じたりするのでは？

他の義務教育学校が捉えている成果・効果

- ・ 体格差による接触トラブルがほとんど起きていない
- ・ 後期課程の生徒が1年生に配慮する姿が見られ、心の成長を感じられる

課題・苦労している点

- ・ 1年生と交流していた9年生と、通りかかった2年生が接触してしまった事例がある。
- 予期せぬ接触リスクがあるため、共有のスペースでは上級生に配慮が求められる

他の義務教育学校の事例を受けての評価・総括

- 他の義務教育学校では、異年齢間の接触やストレスに関する大きな問題はないとする学校が多い。一体型であっても、発達段階に応じて生活空間を緩やかに分け、「一緒に過ごす場」と「分ける場」を適切に設けることが重要である。
- 本市においても、こうした生活空間の工夫を具体的に検討していきたい。

④人間関係・環境の変化をどう生むのか



9年間同じ校舎・人間関係で過ごすことによるマンネリや息苦しさはないのか？

他の義務教育学校の取組（具体的な取組内容）

【外部との交流】

- ・ 外部講師を活用したり、学習ボランティアを取り入れたりなど、外部との関わりで変化を取り入れた教育活動を行っている。
外部講師の例：社会科にて、農家の方を招き講話していただく。
学習ボランティアの例：裁縫（家庭科）、授業支援（算数）、給食支援や登校支援（生活支援）
- ・ 隣接する自治体の小学校と、持久走記録会や凧揚げなどで交流を図る。
- ・ 地域の学校との交流
例：支援学校との交流：9年生がおもちゃを作り、支援学校の子どもと遊ぶ。
日本語学校の学生との交流：お互いの国のプレゼンをしたり、運動会に学生が参加したりなどの交流。

④人間関係・環境の変化をどう生むのか



9年間同じ校舎・人間関係で過ごすことによるマンネリや息苦しさはないのか？

他の義務教育学校の取組（具体的な取組内容）

【学年段階の区切りによる変化】

- ・行事や委員会活動において、6-3制や4-3-2制といった学年ブロックで活動するなど、変化を作っている。
例：委員会活動は5年生以上が参加することで、縦の関わりを増やす。

【教員によるアプローチ】

- ・3年生から一部の教科で教科担任制を導入し、複数の教員が見守る体制をつくる。

他の義務教育学校が捉えている成果・効果

- ・異学年交流で、下級生を支える機会が増え、自己肯定感が高まる
- ・複数の教員と関わることで、担任以外の教員にも相談しやすい環境ができる

④人間関係・環境の変化をどう生むのか

課題・苦勞している点

- ・一部の学校では、「中だるみ」や「息苦しさ」を感じている児童生徒がいる。
- ・小規模校では、少人数ゆえに人間関係の固定化が自ずと生じてしまう。

他の義務教育学校の事例を受けての評価・総括

- 9年間同じ環境で過ごすことによる「中だるみ」や「息苦しさ」を感じる児童生徒がいると捉えている学校もある。一方で、学年ブロック制や異学年・地域・他校との交流、複数の教員による見守りなどにより、環境や人間関係に変化を生み出している。
- 人間関係の固定化は、義務教育学校という学校形態だけでなく、学級数や児童生徒数にも関係するため、学校の実情に応じた継続的な見守りと工夫が重要である。
- 本市においても、外部との交流や内部での繋がりの事例を参考に、環境変化の少なさを補う方法を具体的に検討していきたい。

⑤子どもたちの心のケア・相談体制



新しい環境や固定化された人間関係から生じるストレスに対し、子どもたちの心のケアや相談体制が十分に整備されるのか？

他の義務教育学校の取組（具体的な取組内容）

【ICT機器や定期アンケートの活用】

- ・ 毎日タブレット端末にその日の気持ちを入力する取組
- ・ 学期毎に悩み事調査の実施
- ・ 定期的ないじめアンケートの実施
- ・ 「YOSS」の活用による支援が必要な児童生徒の早期発見

【相談体制の整備】

- ・ SSR（校内教育支援センター）の設置
- ・ スクールカウンセラーの活用

※YOSS：

大阪公立大学が開発した児童生徒支援システム。教員が子どもたちの様子を独自のチェックシート（データ）に入力し、児童生徒の状態を客観的に分析することで、支援の必要な児童生徒を早期発見しやすくなる。

※SSR：

空き教室を活用して、不登校や集団生活に不適應傾向のある児童生徒等を支援する教室のこと。校内教育支援センターともいう。

(Special Support Room)

⑤子どもたちの心のケア・相談体制



新しい環境や固定化された人間関係から生じるストレスに対し、子どもたちの心のケアや相談体制が十分に整備されるのか？

課題・苦勞している点

- ・人間関係の固定化によるトラブルが生じている学校も一部ある。（しかし、少人数による人間関係の固定化が主な要因であり、義務教育学校であることは人間関係の固定化の大きな要因でないと捉えている）
- ・前期課程でのトラブルを後期課程においても引きずってしまう事例がある。

他の義務教育学校の事例を受けての評価・総括

- 調査した全ての学校で、いじめや悩みを早期に把握する仕組みが設けられている。前期課程と後期課程の子ども同士でのトラブルは見受けられない一方、少人数ゆえの人間関係の固定化によるトラブルが生じた事例もあるため、子どもたちの心のケアを行う体制づくりが求められる。
- 本市においても、このような事例を参考に、子どもたちの心のケア体制を具体的に検討していきたい。

※なお、現状でも、スクールカウンセラーによる心のケアや相談体制づくりを行っております。

3 .新しい学校における特色の検討方法に ついて

(1) 小高区における教育環境の特色のイメージ

目指す小高区の実現したい学校の特色（イメージ案）

このイメージ案は、

- 南相馬市教育委員会の小中一貫の取り組み方針
- 令和8年2月・3月に実施した保護者懇談会及び保護者意識調査で出された、保護者の方が考える「目指す子ども像」とそれを実現するためのアイデア

をつなげ「**目指す小高区の実現したい学校の特色（イメージ案）**」として、作成したものです。このイメージを基に、今後フェーズ2の中で、皆さんとともに具体的なことを検討してまいります。

(1) 小高区における教育環境の特色のイメージ

【つながる学び】

「学んだ知識＋使えるスキル」
で学ぶ楽しさが9年間ずっと続く学校へ

- 「おだか」から世界へ！「使える英語力」の育成
- 専門性を生かした多様な学び

【つながる探究学習】

「故郷への誇り＋自ら学ぶ力」で
南相馬から未来へ羽ばたく力を育む

- 古きを知ることからスタート！伝統と新しさの融合
- 未来を創る人材へ！「やりたい」を極める探究的な学び

【つながる居場所づくり】

「地域の温かい見守り＋安心できる空間」
でいつでも自分らしくいられる場所を

- いつでも誰かが見守っている！「チームおだか」の安心環境
- 中学生にもサードプレイスを！放課後の居場所づくり
- 違いを認め、共に育つ！異年齢交流と心のケア

【つながる地域とキャリア】

「まちぐるみの連携＋外部人材の活用」
で子どもたちが将来の夢を描ける環境に

- まち全体がキャンパス！地域資源をフル活用した実践的キャリア教育
- 興味のスイッチを押す！最先端の学びと多様な選択肢
- 「生きる力」へ直結！学校内で完結しない学び

※これらは特色のイメージであり、実際にどのような特色をつけるかについては、今後検討していきます。

(2) 小高区のエ育環境の特色を継続・発展していくための取り組みの方向性について

① 特色を継続・発展していくための取り組みの方向性（案）

現在のきめ細かな指導体制を維持しながら、実践的な外国語教育、プログラミング教育、探究的な学習の充実など、特色ある教育活動の具体的な内容について検討します。

地域の歴史・文化・産業や人材を生かした体験学習などを通じ、地域に根ざした特色ある教育活動の展開を検討します。

⇒これらの事項については、小高4小学校統合時における特色の検討の進め方を参考に、フェーズ2の段階で、保護者・地域の皆様とともに、新しい学校にふさわしい教育内容の具体化を検討します。

(2) 小高区の教育環境の特色を継続・発展していくための取り組みの方向性について

② 特色を継続・発展していくための取り組みイメージの例

【つながる学び】

【「おだか」から世界へ！「使える英語力」の育成】

- 幼児期から中学校まで、発音遊び、フォニックス、ALTとの対話、英検への挑戦を段階的に実施

【つながる探究学習】

【古きを知ることからスタート！伝統と新しさの融合】

- 小高の歴史・文化を地域で学ぶ。
- 新しいもの・人との出会いを通じた体験。
- 学んだ成果を自分の言葉で発信

【つながる居場所づくり】

【いつでも誰かが見守っている！「チームおだか」の安心環境】

- 教職員全体で子どもを見守りケアする体制の構築
- 地域と連携した見守りネットワークを構築

【つながる地域とキャリア】

【まち全体がキャンパス！地域資源をフル活用した実践的キャリア教育】

- 地元事業者等と連携し、商品企画や仕事体験、地域で働く人との交流を実施

※これらは特色のイメージであり、実際にどのような特色をつけるかについては、今後検討していきます。

(3) 【参考】小高4小学校統合時における特色の検討の進め方

- 「南相馬市小高区学校統合準備協議会」（以下、「統合準備協議会」）における特色の検討については、所掌事項推進のために設置した第2専門部会（特色・魅力ある学校運営・教育計画に関することを検討する部会）で検討・協議を行っていた。

◆検討・協議の流れ

- 第2専門部会を設置し、第1回～第3回まで会議を開催。（第3回は書面）
- 教育の特色に係る研究事例や小高区での取り組み等を参考に意見交換。



- 統合準備協議会において検討の経過として以下の方向性を提示
 - ・小高区では、新潟大学と連携した特色ある分野の授業や地域の歴史・文化に触れる「火の玉作り」など、特色ある学校づくりが進んでいます。
 - ・現在実施している地域・大学との連携に注目し、教育効果の高い事業を安定して継続する手法の検討を進めます。



- 提示された方向性を踏まえ、以下の内容で「南相馬市小高区学校統合準備協議会報告書」に記載
『小高区の歴史や文化に触れる機会を設け、郷土愛や豊かな人間性の育成を図ること』

※特色については、このような進め方を参考に、今後、フェーズ2の段階で、保護者・地域の皆様とともに、新しい学校にふさわしい教育内容の具体化を検討します。

(3) 【参考】小高4小学校統合時における特色の検討の進め方

○「南相馬市小高区学校統合準備協議会報告書」への記載内容

○特色ある学校づくりについて

『小高区の歴史や文化に触れる機会を設け、郷土愛や豊かな人間性の育成を図ること』

小高区は、相馬野馬追の拠点である小高神社や浦尻貝塚、大悲山の石仏など歴史的文化に恵まれており、学校の授業でも火の祭に使用する火の玉づくりや藍染め体験など、地域の歴史や文化に触れる機会が設けられています。

また、高等教育機関との連携事業として、新潟大学との連携授業が実施され、子どもたちが自分の将来や目標を考える良いきっかけになっています。

さらに、小高小学校は、市内で唯一の人工芝が敷設された校庭を有しており、運動時の怪我が抑制され、校庭での運動や遊びの幅が広がっています。

これら既存の取組みや施設を活用し、小高区で学ぶ子どもたちが小高の地に誇りや愛着を持ち、豊かな人間性を確保するための取組みを展開していく必要があると考えます。